

第 17 回(2024 年度)JACET 関東支部大会 要綱 最終確定版

●○○ 大会テーマ ●○○

English Language Teaching in Higher Education in the Era of AI

日	程	2024 年 7 月 6 日 (土)	Saturday, July 6th, 2024
受 付 開 始	9 時 00 分より		Registration starts at 9:00 a.m.
受 付 場 所	青山学院大学青山キャンパス 17 号館 5F の 17505 教室	Aoyama Gakuin University, Aoyama Campus Room 17505, Bldg. 17, 5F	
参 加 費	JACET 会員 (他支部会員 も含む) は無料 非会員は 2,000 円	Admission FREE for JACET member; 2,000 yen for non- member	
事 前 申 込	6 月 29 日 (土) まで (事前申込なしの当日参加も可能です)	Last day to pre-register: Saturday, June 29 th , 2024	

当日の受付を円滑に進めるために、事前申込にご協力
ください。事前申込では、会員であるかの確認、
非会員の方には参加費のご案内をしています。

大会に関するお問い合わせはこちらへ。
E-mail: takane46@gmail.com (大会運営委員長 山口高領)

●○● タイムテーブル ●○●

午前

9:30-9:40 (17501 教室)	賛助会員 LT (一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会)
9:30-9:40 (17502 教室)	賛助会員 LT (株式会社 mpi 松香フォニックス)
9:40-10:10 (17501 教室)	研究発表「基礎教養英語 Interaction クラスへの共通教科書リストの導入：学生へのアンケート調査とインタビューからみえる課題」 志村 美加・中竹 真依子・永田 祥子・目黒 沙也香 (学習院大学 外国語教育研究センター) 司会：小屋 多恵子 (法政大学)
9:40-10:10 (17502 教室)	実践報告「自動翻訳・生成AI時代の英文和訳課題の在り方」 大味 潤 (東京経済大学非常勤講師) 司会：下山 幸成 (東洋学園大学)
10:10-10:20 (17501 教室)	賛助会員 LT (株式会社 エル・インターフェース)
10:10-10:20 (17502 教室)	賛助会員 LT (株式会社 アルクエデュケーション)
10:20-10:50 (17501 教室)	研究発表「英語ライティング支援ツールに対する大学生の評価と利用実態—インタビュー談話の分析から—」 山本 綾 (東洋大学)・鈴木 雅子 (昭和女子大学) 司会：大井 洋子 (清泉女子大学)
10:20-10:50 (17502 教室)	研究発表 “Towards a Realistic Teaching of English Pronunciation in Japan” 湯澤 伸夫 (Nobuo Yuzawa) (宇都宮大学) 司会：小張 敬之 (グローバル Biz 専門職大学)
10:50-11:00 (17501 教室)	賛助会員 LT (株式会社 mpi 松香フォニックス)
10:50-11:00 (17502 教室)	賛助会員 LT (一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会)
11:00-11:30 (17501 教室)	研究発表「生態学的な大学英語教育の構想：英語ビジネスコミュニケーションを手掛かりに」 井田 浩之 (城西大学) 司会：馬場 千秋 (帝京科学大学)
11:00-11:30 (17502 教室)	研究発表「非英語母語話者圏への留学：可能性と課題」 藤尾 美佐 (東洋大学) 司会：長田 恵理 (國學院大学) キャンセルでした
11:30-11:40 (17501 教室)	賛助会員 LT (株式会社 アルクエデュケーション)
11:30-11:40 (17502 教室)	賛助会員 LT (株式会社 エル・インターフェース)
11:40-12:30 休憩	

午後 (17510 教室)

12:30-12:50	2024 年度第 1 回支部総会
12:50-13:00	賛助会員 LT (株式会社 アルクエデュケーション)

13:00-13:50	招待講演 “Update on the Current Generative AI Use in Applied Linguistics” 水本 篤 (Atsushi Mizumoto) (関西大学) 司会：河内山 晶子 (明星大学)
13:50-14:00	賛助会員 LT (株式会社 エル・インターフェース)
14:00-15:10	基調講演 “Realigning language assessment practices in the era of AI” Shahid Abrar-ul-Hassan (Yorkville University, Canada) 司会：神村 幸蔵 (筑波技術大 学)
15:10-15:20	賛助会員 LT (株式会社 mpi 松香フォニックス)
15:20-16:25	SIG シンポジウム：「AI と切り拓く大学英語教育の未来」を話し合うシンポジウ ム (JACET AI と大学英語教育研究会)
16:25 閉会	

JACET 非会員の方は、この機会に会員になることをご検討下さい。この支部大会の参加費が無料になるだけでなく、今年度のイベントの参加やジャーナル入手などの特典があります。入会情報は以下をご覧ください。

https://www.jacet.org/about_jacet/how_to_join_jacet/

●○● ご案内 ●○●

1. 支部大会はすべて対面で、17号館 5Fで行われます。

青山学院大学青山キャンパス（〒150-8366 東京都渋谷区渋谷 4-4-25）

<https://www.aoyama.ac.jp/outline/campus/aoyama.html>

2. 事前申込にご協力ください。

当日の受付を円滑に進めるためです。事前申込では会員であるかの確認、非会員の方には参加費のご案内をしています。以下の「事前申し込みフォーム」に回答をお願い申し上げます。

<https://forms.gle/5jJvV4XgioxY9ThV9>

回答終了後、回答のコピーに加えてお願い事項がメール送信されます。受信できない場合にはメールアドレスの入力誤りの可能性があります。修正がありましたら速やかにご修正下さい。

当日来場できなくなった場合に、ご連絡をくださる必要はございません。

非会員の方は、「事前申し込みフォーム」への回答後、6月28日（金）までに郵便振込を行ってください。郵便振込先は、以下です。

●郵便振替口座

口座番号： 00110-7-61932

加入者名： 一般社団法人大学英語教育学会

通信欄に、「関東支部大会参加」と「ご所属とお名前とメールアドレス」をご記入ください。6月29日（土）以降に郵便振込を行った場合は、送金したことを示す「払込取扱票」などを撮影した画像ファイルを、r-tsuji@wayo.ac.jp（和洋女子大学 辻りこ）までメール添付してください。

3. 支部大会当日

①最初に、当日の受付のために、17号館 5Fの17505教室（大会本部）にいらしてください。当日受付では、QRコードを読み取って入力を行って頂く予定です。名札は必要であればご自身でご用意ください。

②その後、各会場へお進みください。

17501 教室：午前の発表会場 1

17502 教室：午前の発表会場 2

17503 教室：打ち合わせなどのスペース

17504 教室：賛助会員の展示会場 1

17506 教室：賛助会員の展示会場 2

17505 教室：当日受付と大会本部

17510 教室：午後の発表会場

③賛助会員の展示は2箇所に分かれています（17504 教室と 17506 教室）。13 社の展示があり、教育・研究に有用な資料の入手が可能です。以下はその 13 社です（申込順）。

株式会社 成美堂

株式会社 アルクエデュケーション

株式会社 朝日出版社

株式会社 三修社

株式会社 エル・インターフェース

株式会社 松柏社

株式会社 mpi 松香フォニックス

株式会社 南雲堂

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

株式会社 金星堂

ETS Japan

株式会社 EdulinX

株式会社ダンケゼア

⑤無線 LAN 環境

青山学院大学では eduroam が使えますが、当日のみ使える無線 LAN アカウント（無料）をご希望の方は、「事前申込みフォーム」にてお申し込みください。希望多数の場合には、ご希望に添えない場合があります。

⑥録画、録音等をしないでください。関東支部では、記録のためにすべての発表を録画する予定であることをご了解下さい。

⑦昼食など

17 号館 1F にはカフェテリアがあります。飲み物の自販機は 5F と 3F にあります。となりの 1 号館 1F にコンビニもあります。

4. 発表者の方へ

HDMI ケーブルは会場にありますが、HDMI 端子をご用意ください。

発表 10 分前に会場に入り、司会者の先生を見つけてください。

ご発表を始めていただき、20 分から 25 分経過したら、質疑などに対応してください。

5. 司会者の方へ

発表 10 分前に会場に入り、発表者の先生を見つけてください。

ご発表を始めていただき、20 分経過したら、「20 分経過しました」と伝え、

25 分経過したら「25 分経過しました」と伝え、質疑などを参加者から募ってください。

30 分経過したら、「これにてご発表は終了です」と参加者に伝える。

7 月末までにご発表の様子を、山口のメール takane46@gmail.com に送ってください。字数は、日本語発表には 200 字程度、英語発表は 100 から 200 語程度です。送る前に、発表した先生に確認をとってください。その後、9 月末に関東支部のニューズレターに掲載されます。たとえば、昨年度の支部大会の報告が掲載されているニューズレターは以下です。

https://jacet-kanto.org/newsletter/JACET-Kanto_Newsletter_No.21.pdf

●○● 目次 ●○●

ご挨拶

JACET 会長 小田 眞幸（玉川大学）	1
----------------------------	---

ご挨拶

JACET 関東支部支部長 山口 高領（秀明大学）	2
---------------------------------	---

Keynote Speech “Realigning language assessment practices in the era of AI”

Shahid Abrar-ul-Hassan (Yorkville University, BC Campus, Canada)	3
--	---

Invited Lecture “Update on the Current Generative AI Use in Applied Linguistics”

Atsushi MIZUMOTO (Kansai University)	6
--	---

研究発表 9:40-10:10 (17501 教室)「基礎教養英語 Interaction クラスへの共通教科書リストの導入：学生へのアンケート調査とインタビューからみえる課題」

志村 美加・中竹 真依子・永田 祥子・目黒 沙也香（学習院大学外国語教育研究センター）	9
---	---

実践報告 9:40-10:10 (17502 教室)「自動翻訳・生成AI時代の英文和訳課題の在り方」

大味 潤（東京経済大学非常勤）	11
-----------------------	----

研究発表 10:20-10:50 (17501 教室)「英語ライティング支援ツールに対する大学生の評価と利用実態—インタビュー談話の分析から—」

山本 綾（東洋大学）・鈴木 雅子（昭和女子大学）	13
--------------------------------	----

研究発表 10:20-10:50 (17502 教室) “Towards a Realistic Teaching of English Pronunciation in Japan”

Nobuo Yuzawa (Utsunomiya University)	15
--	----

研究発表 11:00-11:30 (17501 教室)「生態学的な大学英語教育の構想：英語ビジネスコミュニケーションを手掛かりに」

井田 浩之（城西大学）	17
-------------------	----

~~研究発表 11:00-11:30 (17502 教室)「非英語母語話者圏への留学：可能性と課題」Cancelled~~

藤尾 美佐（東洋大学） 19

公募シンポジウム 15:20-16:25 (17510 教室)「AI と切り拓く大学英語教育の未来」を話し合うシンポジウム」

JACET AI と大学英語教育研究会..... 21

発表審査査読者 23

展示を行う賛助会員 23

支部大会運営組織 24

Call for Papers: JACET-KANTO Journal Vol. 12 25

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER
大学英語教育学会（JACET）関東支部会員各位

大学英語教育学会会長
小田眞幸（玉川大学）

ご挨拶

日頃の学会活動にご参加いただきましてありがとうございます。

この度は第 17 回（2024 年度）JACET 関東支部大会が 2024 年 7 月 6 日（土）に青山学院大学青山キャンパスで開催されますことを心よりお祝い申し上げます。ここ数年 Artificial Intelligence (AI)の進歩は目覚ましく、私たちの生活の様々な場面に影響を与えつつあります。これは英語教育も例外ではなく、これまでに出来なかったことあるいは困難であったことを簡単に行うことが出来るようになった面もあります。その一方学習者、さらに英語教育全体に与える悪影響や様々な潜在的风险も指摘されています。

今年度の関東支部大会は “English Language Teaching in Higher Education in the Era of AI” というテーマで、特に私たち英語教育関係者が AI とどう付き合っていくべきかを皆さんと一緒に考えて行きたいと思います。今年度のプログラムは Yorkville University の Shahid Abrar-ul-Hassan 先生による基調講演 “Realigning language assessment practices in the era of AI”のほか、関西大学の水本篤先生による招待講演 “Update on the Current Generative AI Use in Applied Linguistics”をはじめ、Workshop, 実践報告、さらに様々な研究発表と盛りだくさんのプログラムが組まれています。

今年度の支部大会は対面形式で開催されます。関東支部大会はここ数年オンラインで開催されていた関係もあり、支部会員以外の参加者も多数あり、活発な議論が行われていました。今年度は対面開催ですが前年度に引き続き全国からの参加者、発表者をお迎えし活発そして有意義な議論が行われることを期待します。

本大会の発表者、参加者、賛助会員の皆様、そして企画運営に関わった関東支部の委員の皆様、並びに会場を使わせていただく青山学院大学には深く感謝いたします。学会としても支部大会を通して大学英語教育にさらなる貢献ができればと思います。関東支部大会のご成功をお祈りいたします。

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER
本大会にご参加のみなさま

大学英語教育学会関東支部支部長
第 17 回 JACET 関東支部大会委員長
山口高領（秀明大学）

ご挨拶

今年度は、久しぶりの対面での支部大会の開催でございます。佐竹由帆先生（青山学院大学）にご尽力いただき、青山キャンパスで開催することができました。

本大会では、大会テーマを“English Language Teaching in Higher Education in the Era of AI”と設定しました。この大会テーマに沿って、基調講演は、米国 TESOL International Association の元 Chair of ESP Interest Section でもある、Shahid Abrar-ul-Hassan 先生（Yorkville University 大学）に“Realigning language assessment practices in the era of AI”をお願いすることができました。

また、昨年度好評だった招待講演を踏まえ、水本篤先生（関西大学）に、“Update on the Current Generative AI Use in Applied Linguistics”という招待講演も行われます。

さらに、従来のように、研究発表・実践報告の他、SIG のシンポジウムもございます。賛助会員によるライトニングトーク（LT）も行われます。

今回は、対面開催です。対面開催の強みは、参加者が直接的な交流ができることにありますが、これは新たな関係構築のきっかけになると考えています。また、13 社という支部大会最大規模の賛助会員の展示も行われます。展示を眺めるだけでも、教育・研究に有用な情報が得られるはずです。

今回の発表審査には、11 名の先生にご協力頂きました。発表審査委員（50 音順）は、Paul McBride 先生（玉川大学）、新井巧磨先生（早稲田大学）、伊藤泰子先生（神田外語大学）、長田恵理先生（國學院大學）、神村幸蔵先生（筑波技術大学）、下山幸成先生（東洋学園大学）、関戸冬彦先生（白鷗大学）、中山夏恵先生（文教大学）、西川恵先生（東海大学）、馬場千秋先生（帝京科学大学）、藤枝豊先生（大阪経済大学）です。各先生にお礼を申し上げます。

また、大会運営に当たりまして、多くの先生方にご協力頂きました。副支部長の長田恵理先生（國學院大學）、会員のみなさまへの連絡のお手伝いをしてくださった、事務局幹事の佐竹由帆先生（青山学院大学）、新井巧磨先生（早稲田大学）、鈴木健太郎先生（北海道教育大学）、司会を積極的に引き受けていただきました運営委員の先生方にも、改めましてお礼申し上げます。

どうぞ今後とも、JACET および関東支部の益々の発展に向けてご尽力いただけますよう、よろしくお願い申し上げます。

Keynote Speech

Realigning language assessment practices in the era of AI

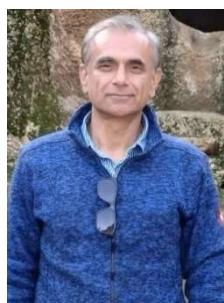
Shahid Abrar-ul-Hassan

(Yorkville University, BC Campus, Canada; Past Chair of ESP Interest Section,
TESOL International Association (USA))

Abstract:

As English for Specific Purposes (ESP) programs proliferate and diversify at higher education institutions across the world, assessment practices, literacies, and resources need to conform to the demands of needs-driven language education for communication in disciplinary discourses (Abrar-ul-Hassan & Fazal, 2018; Hamp-Lyons, 2011; Hyland, 2016). The onset of generative AI has further highlighted the limitations of traditional assessment for ESP, which has been established by research (e.g., Abrar-ul-Hassan & Douglas, 2020; Schmitt & Liz Hamp-Lyons, 2015; Murray, 2019). Considering the current directions in research, this session analyzes how to realign ESP assessment to respond to, the emergent AI scenario for instance, and the impact of language assessment literacy (LAL) on effective assessment practices in ESP programs.

About the presenter:



Shahid Abrar-ul-Hassan has been working as a language educator, researcher, and teacher development professional for over two decades at institutions in many regions of the world. He is currently Professor (English language and communications) at Yorkville University, British Columbia Campus in New Westminster, BC, Canada. He also served as a Subject Matter Expert with the British Columbia Ministry of Advanced Education and Skills Training in Canada. He is Visiting Professor at the School of Foreign Languages, Southeast University (东南大学), Nanjing, China and Guest Faculty, Yunus Professional Master's, Asian Institute of Technology, Bangkok, Thailand.

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

Shahid was Co-Editor of the Special Issue on language assessment literacy of *System* (An international journal of educational technology and applied linguistics by Elsevier). He has served as an editor of *TESOL Journal* as well as the volume editor of Teaching English as an International Language (Volume 1) of the *TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*, both published by Wiley-Blackwell. He served on the Advisory Committee for the TESOL Certificate program in the College of Education, University of Missouri, USA and was Visiting Researcher in the College of Education and Human Development, The University of Texas at San Antonio, USA. Shahid also completed a term as Secretary (elected executive) of TESL Canada Federation and Chair of TESL Canadian Educational Foundation. He has performed several leadership roles with TESOL International Association (USA) including as Chair of Interest Sections, Member of the Nominating Committee, and a coordinator of Awards Professional Council. In recognition of his contribution to the field, Shahid was honored with an Alumni Achievement Award (2018) by the Middlebury Institute of International Studies at Monterey, California. He received Best Teacher award (2010) from Sultan Qaboos University for excellence in research/teaching.

Shahid earned his MA TESOL and Postgraduate Certificates in CALL as well as Language Program Administration from the Middlebury Institute of International Studies at Monterey (USA) and PhD Education from the University of British Columbia, Vancouver (Canada). He has offered invited (onsite) professional development sessions at universities in Albania, Algeria, Canada, China, Indonesia, South Korea, Mongolia, Nepal, Oman, Pakistan, Sri Lanka, Taiwan (China), Thailand, Turkey, USA, and Vietnam. His professional areas of interest include *ESP/EAP, cross-cultural communication, learner-centered instruction, learner motivation, differentiated teacher development* (also, research and publication literacy), and *effective language assessment*. Email: shahidabrar@yahoo.com

Selected publications:

- Abrar-ul-Hassan, S. (2024). Motivational strategies. In H. Nassaji (Ed.). *The TESOL Encyclopedia of English Language Teaching*. Hoboken, NJ: Wiley Blackwell.
- Abrar-ul-Hassan, S., & Nassaji, H. (2024). Rescoping language assessment literacy: An expanded perspective. *System*. [SSCI]
- Abrar-ul-Hassan, S., Douglas, D., & Turner, J. (2021). Revisiting second language portfolio assessment in a new age. *System*. [SSCI]
- Abrar-ul-Hassan, S. (2021). Linguistic capital in the university and the hegemony of English: Medieval origins and future directions. *SAGE Open*. [SSCI]
<https://doi.org/10.1177/21582440211021842> (**Downloadable**)
- Abrar-ul-Hassan, S., & Douglas, D. (2020). Language assessment and the good language teacher. In C. Griffiths & Z. Tajeddin (Eds.). *Lessons from good language teachers* (pp. 107-120). Cambridge, UK: Cambridge University Press.



Invited Lecture

Update on the Current Generative AI Use in Applied Linguistics

Atsushi MIZUMOTO (Kansai University)

In last year's invited lecture, I explored "What ChatGPT Brings About in English Education." At that time, ChatGPT had been on the market for only about six months, resulting in limited research and practice, with a few notable exceptions (e.g., Mizumoto & Eguchi, 2023). This year, I will highlight the expanding body of research and practice in applied linguistics since then. Additionally, I will summarize the evolving ethical perspectives on using generative AI in English education and discuss an optimal framework and model for future research involving ChatGPT (e.g., Mizumoto, 2023). I will also present several of my recent studies that demonstrate the practical applications of generative AI in language teaching and learning (e.g., Mizumoto et al., in press).

As generative AI continues to evolve, it is crucial for language practitioners to integrate these tools into their teaching methodologies. Teachers must also enhance their language proficiency and pedagogical skills to remain essential in an AI-driven educational landscape. In this lecture, I will showcase these aspects with specific examples, providing insights into the future of language education in the era of generative AI.

References

- Mizumoto, A., Shintani, N., Sasaki, M., & Teng, M. F. (in press). Testing the viability of ChatGPT as a companion in L2 writing accuracy assessment. *Research Methods in Applied Linguistics*.
- Mizumoto, A. (2023). Data-driven learning meets generative AI: Introducing the framework of metacognitive resource use. *Applied Corpus Linguistics*, 3(3), 100074. <https://doi.org/10.1016/j.acorp.2023.100074>
- Mizumoto, A., & Eguchi, M. (2023). Exploring the potential of using an AI language model for automated essay scoring. *Research Methods in Applied Linguistics*, 2(2), 100050. <https://doi.org/10.1016/j.rmal.2023.100050>

About the presenter:



Atsushi Mizumoto, Ph.D. in Foreign Language Education, is a Professor at the Faculty of Foreign Language Studies and the Graduate School of Foreign Language Education and Research at Kansai University, Japan. His expansive research interests span learning strategies, language testing, corpus use for pedagogical purposes, and research methodology. He has significantly contributed to the academic community with publications in prominent journals such as *Applied Linguistics*, *Language Learning*, *Language Teaching Research*, *Language Testing*, and *System*.

Dr. Mizumoto is an active member of several professional associations and has served as Vice President of the Japan Association for English Corpus Studies. He has contributed to the field as a reviewer and editorial board member for various journals, including *Applied Corpus Linguistics*. His notable publications include works on the use of AI in automated essay scoring (Mizumoto & Eguchi, 2023), which has received more than 110 citations within a year of its publication. Additionally, his 2023 paper "Calculating the relative importance of multiple regression predictor variables using dominance analysis and random forests" (Mizumoto, 2023) was selected as one of the "Top 10 Most Cited Papers of 2022-2023" by the international academic publisher WILEY.

He is the recipient of several awards, including the Best Academic Paper Award from the Japan Society of English Language Education in 2014, the Research Encouragement Award from the Japanese Association for English Corpus Studies in 2016, and the Award for Outstanding Academic Achievement from Language Education and Technology in 2017. Dr. Mizumoto has also been the principal investigator for multiple grants from The Japan Society for the Promotion of Science.

Website: <http://mizumot.com> Email: mizumoto@kansai-u.ac.jp

Selected publications:

- Mizumoto, A., Shintani, N., Sasaki, M., & Teng, M. (in press). Testing the viability of ChatGPT as a companion in L2 writing accuracy assessment. *Research Methods in Applied Linguistics*.
- Mizumoto, A. (2023). Data-driven learning meets generative AI: Introducing the framework of metacognitive resource use. *Applied Corpus Linguistics*, 3(3), 100074. <https://doi.org/10.1016/j.acorp.2023.100074>
- Mizumoto, A., & Eguchi, M. (2023). Exploring the potential of using an AI language model for automated essay scoring. *Research Methods in Applied Linguistics*, 2(2), 100050. <https://doi.org/10.1016/j.rmal.2023.100050>
- Mizumoto, A. (2023). Calculating the relative importance of multiple regression predictor variables using dominance analysis and random forests. *Language Learning*, 73(1), 161–196. <https://doi.org/10.1111/lang.12518>
- Mizumoto, A., Sasao, Y., & Webb, S. (2019). Developing and evaluating a computerized adaptive testing version of the Word Part Levels Test. *Language Testing*, 36, 101-123. <https://doi.org/10.1177/0265532217725776>
- Mizumoto, A., Hamatani, S., & Imao, Y. (2017). Applying the bundle-move connection approach to the development of an online writing support tool for research articles. *Language Learning*, 67, 885–921. <https://doi.org/10.1111/lang.12250>
- Mizumoto, A. (2010). *Exploring the art of vocabulary learning strategies: A closer look at Japanese EFL university students*. Tokyo: Kinseido.
- 竹内理・水本篤（編著）（2023）.『外国語教育研究ハンドブック【増補版】—研究手法のより良い理解のために—』松柏社

基礎教養英語 Interaction クラスへの共通教科書リストの導入： 学生へのアンケート調査とインタビューからみえる課題

Introducing a List of Textbooks for General English Interaction Classes: Issues Identified from a Survey and Interviews to Students

志村 美加、中竹 真依子、永田 祥子、目黒 沙也香
(学習院大学外国語教育研究センター)

1. はじめに

学習院大学外国語教育研究センターでは、コロナ禍によりオンライン形式で授業が行われていた 2021 年度から基礎教養科目としての英語カリキュラムの改編に着手した。改編の第 1 段階として少人数、習熟度別クラス編成を導入し、第 2 段階として 2023 年度から共通教科書リストの導入を開始した。本研究では、英語 Interaction クラスへの共通教科書リストの導入がどのような変化をもたらしたかを明らかにすることを目的とする。また、学生へのアンケート調査とインタビューを通して、共通教科書リスト導入後の課題を検討する。

2. 本研究への参加者と調査方法

本研究の参加者は、2023 年度の Interaction クラスを必修科目として履修した法学部、文学部、理学部の 1・2 年生であり、1 学期末と 2 学期末にアンケートを行った。

アンケートは、7 月上旬と 12 月中旬にマークシート形式で行った。有効回答者数は 1 年生 1,339 人、2 年生 823 人、回答率は 2 回の平均が 85.9%（1 学期末 90.5%、2 学期末 81.9%）となった。アンケートは選択肢形式と自由記述形式から構成され、本研究では①教科書の難易度、②教科書の内容やアクティビティへの関心、③英語を話すことへの自信、④教員、そして⑤クラスメートと話した機会の 5 項目を取り上げる。なお、教員は英語母語話者、あるいは海外で長い期間生活をしていたことがある非常勤講師から構成されている。

インタビューは、発表者が担当するクラスの学生に学内システムを利用して協力を依頼した。最終的に 12 名（1 年生 4 名、2 年生 8 名）から調査協力の同意を得られ、年度末の 3 月に Zoom を用いたインタビューを実施した。

3. アンケートの分析結果

3.1.教科書のレベルは適切だったか？

教科書のレベルに関しては、1年生の 81.6%、2年生の 75.9%が「適切なレベルだった」と回答し、1年生の 12.9%、2年生の 19.4%の学生が「レベルは高かったがやりがいがあった」と回答した。

3.2.教科書の内容や練習問題、アクティビティには関心が持てたか？

内容やアクティビティに関心を持てたかという問いについては、1年生の 87.2%、2年生の 82.6%が「非常にそう思う」または「そう思う」と回答した。逆に「あまりそう思わない」と回答した1年生は 11.1%、2年生は 15.5%だった。

3.3.スピーキング力の自信につながったアクティビティの種類は？

「会話練習」と回答した1年生は 48.8%、2年生は 46.3%、「スピーチ、プレゼンテーション」と回答した1年生は 44.0%、2年生は 37.3%、「ディスカッション」と回答した1年生は 32.6%、2年生は 28.1%だった。

3.4.授業で教員や他の学生と英語を話す機会は十分にあったか？

		非常に そう思う	そう思う	あまりそう 思わない	全くそう 思わない
教員と話す機会	1年生	34.1%	53.8%	11.3%	0.8%
	2年生	28.6%	56.1%	14.8%	0.6%
他の学生と話す機会	1年生	66.1%	31.7%	1.8%	0.4%
	2年生	57.0%	37.1%	5.1%	0.7%

4. インタビューの分析結果

インタビューからも、多くの学生が教科書のレベルやアクティビティに関して問題がないと捉えていることが明らかになった。社会問題や身近なテーマを扱い、新しい知識を得られることが満足感につながっている。また、会話練習を他の学生と行うことが大半だったが、高校では英語を話す機会や意見を言う機会が少なかったため、満足している学生が多い。教員と話す機会に関しても、高校まで“ネイティブ”の教員と話す機会がなかった学生が多く、少しでも話す機会があれば満足度が高かった。しかし、日常会話ではなく、ディスカッション等の意見交換の機会が十分であるかは更なる検証が必要である。また、スピーチやプレゼンテーションに関しては、多くの学生にとって人前で英語で話すという大きな挑戦であるにもかかわらず、教員からのフィードバックは限られていたことが明らかになった。習熟度に応じた議論の促し方やフィードバックについては、共通教科書リストを導入後、ワークショップ等を通じて教員間でコンセンサスを醸成することが必要であろう。

自動翻訳・生成A I時代の英文和訳課題の在り方

Translation Questions in the era of Auto Translation & Generative AIs

大味 潤（東京経済大学非常勤）

「はじめに」

文法語彙偏重、入試や各種試験対策優先の傾向が強い英語教育では、英語や英文の奥深さに触れる機会は少ない。一方で自動翻訳や生成A Iが日常的に流布し、高校大学の教科書の答えもネット上で検索可能、また大学入試でも質問箱等で解答を求める時代になった。そんな現代にどのような和訳課題が適切か模索して18年が過ぎた。今回は英語教育のみならず、日本語教育、国語教育、そして同時通訳者の観点から、高等教育にふさわしい翻訳課題を提唱し、英語教育に携わっている関係者のご参考にして頂きたいと思う。

「国語教育から見た問題点」

国語教育の観点から英文和訳で気になるのは、1) 漢字表記の正確さ、2) 句読点の正確さ、そして何より3) 自然な日本語表現かどうかである。英語教員自身が原文に引きずられて不自然な日本語表現を使用することもあるようだが、辞書訳そのものや代名詞の直訳でことを済ます傾向があるのではないか。しかし翻訳作業を終えて和文になった瞬間、今度は正しく且つ自然な日本語かの検証が必要となるはずである。「students」も小学生なら「児童」、中高生なら「生徒」、専門学校・大学等なら「学生」と異なる。「a variety of college textbooks」は「様々な大学の教科書」か「大学の様々な教科書」か、正しく訳し分けているだろうか。

「日本語教育から見た問題点」

日本語学習者の作文を数年間直した後に、日本人英語学習者の日本語を見た時も違和感を禁じ得ないことが多かった。英語教育では「They」を「彼らは」と直訳で済ませることがあるが、日本語の場合はその指す対象が生物か無生物によって訳し分け、また人間か動物か昆虫かで訳し方を変えるのが正しく、これは「There is」構文でも同様である。「He」「She」等の代名詞を訳す際にもその対象が目上ならば「お父さん」「先生」等で表記すべきで、「彼」「彼女」等ではそもそも失礼であろう。

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

「同時通訳から見た問題点」

「Some people smoke in Japan.」を英語教育では「いくつかの人々は喫煙する。」の直訳や、「何人かの人々は喫煙する。」で済ませてしまうのではないか。物を表す「いくつか」は論外としても、「何人」という表現は日本語では「1人～9人」までしか表さない。実際の喫煙者は10人未満のはずはなく、文脈により「数百万人」「数十万人」等の答えが最低でも必要となるはずである。「your company」として「御社」「先輩の会社」「君が担当の会社」等、場面に応じた異なる訳は必須であろう。

「翻訳問題」

以上の理由から発表者のクラスでは「英文和訳」ではなく、「翻訳問題」として設定し採点基準を定めた。文法的に合っているか、語彙の訳が正しいかどうかのみを問う従来の「和訳」では、辞書訳を適当に並べただけの逐語訳でも、将又自動翻訳の丸写しでも得点は可能になる。これでは学生本人は元より、誰が読んでも意味不明な怪文が量産されるだけで、学生自身の語学力向上には繋がらない。同時に、そのような解答が果たして学生が自力で解いたのか、クラスメートやネット上の他人の答え、またAIの解答を写したかの区別も出来ない。

よって問題設定に当たっては自動翻訳やAIの弱点となる、1) 名詞や代名詞の具体化、2) 前後の文脈の説明、3) 何より自然な日本語への言い換え、等を必須とした。従って名詞と代名詞の指示内容の解釈、カンマで前後を区切られた挿入句、また直訳では意味をなさない語彙や熟語表現、特に文脈を考慮に入れない訳し様の無い英文を中心に出题している。この際不正行為防止の為、他人の解答と表記が3箇所以上異なることを解答のルールとして周知させている。またこの翻訳問題を回避する者が出る為、翻訳で無得点の場合は課題そのものを無効としておくことも必要となる。問題の詳細は発表の際に紹介させて頂く。

「成果とまとめ」

以上ご紹介した課題では、学生本人のやる気が成否を決めており、当クラス受講までの学習歴やプレースメントテストの得点とは相関は無かった。寧ろそれまでの英語の授業において全く評価されて来なかった学生の中から、言葉選びの優秀な者が頭角を現すケースが目立つ。英語が得意な学生は授業内外で質問を繰り返し、苦手な学生は仲間内で相談しながら答案を提出していた。教材の難易度はクラスによって変えるが、英語クラス全般に於いて専攻やレベルを問わずこれまで有効である。様々なクラスの先生方にお試し頂き、成果や感想を伺いたいと思う。

英語ライティング支援ツールに対する大学生の評価と利用実態 —インタビュー談話の分析から—

Student Perceptions and Usage of a Writing Support Tool: Analysis of Interview Discourse

山本 綾（東洋大学）

鈴木 雅子（昭和女子大学）

はじめに

大学英語教育では、英語ライティング支援ツールを取り入れる動きが広がっている。ある大学の英語系学科では英語ライティング支援ツール Grammarly のライセンスを学生全員に在学期間を通して付与し、1 年次必修のライティング科目から利用を促している。しかし、入学直後に行った質問紙調査によると、学生はツールによる添削にやや消極的な傾向を示した（山本・鈴木, 2023）。そこで本研究ではツール利用に対する態度と行動を検証するために、上級生へのインタビューに基づき、研究課題 1. Grammarly をどのように評価しているのか、またその理由、2. Grammarly をどのように利用しているのかを探究した。

調査対象者と方法

英語系学科 2、3 年次に在籍する 5 名（S1～S5）に、教員 2 名が対面で個別（S4, 5 は同時）に半構造化インタビューを行った。全員が 2 年次に英語圏の語学学校で約 2～4 カ月、続けて英語圏の大学の学部正規課程または入学準備課程で 1～2 学期にわたり学んだ経験を持つ。インタビュー談話は全て文字化し、質問と回答からなる隣接応答ペア、Grammarly にまつわるナラティブ—特に過去の出来事の再現性を高めるとされる引用発話—に着目して質的に分析した。

結果

【研究課題 1】5 名中 4 名が明確に肯定的な評価を述べた。入学まで Grammarly を用いた経験はなかったが、次第にその有用性を認め、やがて不可欠といえるほど頼りにするようになったという。

- (1) S3: あ、Grammarly とかがほんとに使ってなかったんで、なんか、大学に入って初めてそれ、知りました((中略)) あ、でも、すごい助かってます。

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

- (2) S1: 2年生の最初のほうに((語学学校名))にいた子たちでみんな使えない時があつて、それでみんな、「ねね、Grammarly が使えない」って (教員: あ、そうなの) パニックになった記憶が。

高評価の理由として、S3 は「打った後にすぐ直してくれるから、『あ、こうだったんだ』ってすぐ気付くことができる」、S1 は「自分の中になかった新しい表現とかも見つけられると思う」と説明した。

一方で、S2 は Grammarly を使ったかという問いに「はい、使ってしまいました」と遺憾を表す補助動詞テシマウを用いて答え、Grammarly による提案と自身が表現したいことが一致しない場合の葛藤を次のように語った。

- (3) S2: でも、やっぱり自分の実力よりも AI の力を信じちゃうので、私は、け、(教員: そう) そう (教員: だよ) 「まあ、Grammarly が言うなら、ま、しょうがない (教員: うん) か」 と思って((中略)) ま、中には、うーん。Grammarly を、私より信じて使ってる子もいて。「でも、それって AI じゃん。AI が言ってることで信用していいの？」って思うことも、ま、たくさんあったりとか。

【研究課題 2】 5 名とも Grammarly を継続して自発的に用いてきたと述べた。また、試行錯誤して設定を調整したり、留学先で Grammarly が組み込まれた指導を受けたりしたという。

- (4) S3: ほとんど入れられる (教員: うん) とこ、(教員: うんうん) には全部、多分 (教員: うんうん) Grammarly 入ってます。((中略)) めっちゃ活用してます ((笑))
- (5) S1: ((設定は)) 「こうしたらここが変わるんだな」って思いながら (教員: うーん) それでやった記憶あります。
- (6) S5: ワード、うん、文法 (教員: うん) とかはもう先生もそれに頼って (教員: あーあ) 「これ見といて」みたいな感じの (S4: うんうん) 人もいました。

まとめと考察

大学入学時点で Grammarly 利用経験がなくとも、その利点 (例. 即時フィードバック、表現の提案) を見出して肯定的評価と活用に至ることが明らかになった。一方、Grammarly の基盤である AI の信頼性をめぐる懸念も見てとれた。Grammarly による添削を英語運用能力の向上に役立つとみるか、書き手の意図から離れるおそれがあるとみるかによって、利用態度が異なると考えられる。

引用文献

山本綾・鈴木雅子 (2023). 「大学新入生の英語アカデミック・ライティングに対する意識調査」『学苑』 971, 29-37. <https://swu.repo.nii.ac.jp/records/7322>

謝辞 本研究は JSPS 科研費 21K00658 の助成を受けている。

Towards a Realistic Teaching of English Pronunciation in Japan

Nobuo Yuzawa (Utsunomiya University)

There will be almost no disagreement about the view that the three fundamental components of English teaching are words, grammar, and pronunciation. They form a three-legged stool. Lacking any one leg compromises stability. However, many Japanese English teachers I have seen so far complain about a serious problem with insufficient time to adequately teach pronunciation, though a fact-finding survey conducted by the Benesse Educational Research and Development Institute (2015) reveals interesting results.

English is currently one of the international languages and facilitates communication in diverse settings such as conferences and business meetings. Therefore, clear communication is crucial, from formal presentations and discussions to casual conversations and social interactions. Naturally, the key to clear communication lies in pronunciation, especially internationally intelligible pronunciation. However, the effectiveness of teaching English pronunciation in Japan is questionable. This is evident from my experience of teaching English at university. Many students use a strong Japanese accent and misplace stress. They say their teachers did not teach pronunciation. They do not know the qualitative difference in vowels, for example, between ‘leave’ and ‘live’. Malaysian exchange students initially tend to face difficulty in understanding their English. I have not seen students who had been taught phonemic symbols comprehensively in school. Entrance exams, focusing little on speaking skills in English, may underscore a systemic neglect of this crucial skill.

What is the appropriate English pronunciation for Japanese learners? The Ministry of Education states only that pronunciation should align with contemporary standards. Despite this, General American has been selected as the de facto standard in Japan since the end of World War II, and it has been influencing educational materials and even entrance exams for a long time. One of the negative effects of the widespread use of this accent is found in some students’ negative attitudes toward other accents (Matsuura and Wako, 2019).

Since Japan does not have a domestic English model, it needs to look abroad. The realistic model is either General American or Received Pronunciation as they are established varieties and educational materials for these accents abound. However, these two accents are difficult to achieve for many Japanese learners.

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

That is why it is worth considering a realistic model from the viewpoint of international intelligibility as a desperate measure.

Jenkins (2007) identifies essential features for understanding across accents: almost all consonants, consonant clusters, vowel length, and word and nuclear stress. These essential features are widely referred to as the 'Lingua Franca Core' (LFC). If the LFC is introduced into Japan's English teaching effectively, it could streamline pronunciation teaching and improve outcomes, ensuring effective use of limited instructional time. However, the *Course of Study*, stipulating Japan's important educational guidelines, does not prioritize key pronunciation elements. It covers only basic aspects, such as sound change and stress patterns. It should integrate insights from the LFC to teach pronunciation more effectively.

In this presentation, I would like to emphasize the importance of international intelligibility, depicted in the LFC, as a realistically minimum goal and practical way of improving English pronunciation teaching in Japan under its harsh reality. At the same time, I will discuss the importance of adjusting goals for varying student needs and abilities and the significance of different approaches to productive and receptive competencies. I should also mention a concern about this realistic teaching by quoting Ohta (2013), who points out that it is a complete misunderstanding of the subject and an abdication of responsibility as a teacher to tell students to speak freely, without regard to native speakers' pronunciation, using the Lingua Franca concept as an invisible cloak. Misunderstanding of the LFC might result in such an idea, which must be carefully avoided.

References:

- Benesse Educational Research and Development Institute (2015). A Survey on English Language Teaching in Junior and Senior High Schools in 2015. https://berd.benesse.jp/up_images/research/Eigo_Shido_all.pdf
- Jenkins, J. (2007). *English as a Lingua Franca: Attitude and Identity*. Oxford: Oxford University Press.
- Matsuura, H., & Wako, M. (2019). Japanese Learners' Attitudes Toward World English Accents: A Comparison Between Middle School and University Students. *Journal of Commerce, Economics and Economic History, Fukushima University*, 87(4), 1-13.
- Ota, K. (2013). A Blind Spot of English Education in Japan: Present State and Problems of English Phonetic Pedagogy in School Education. *Kokusai Kankeigaku Bulletin, Kyushu International University*, 8(1&2), 37-69.

生態学的な大学英語教育の構想：
英語ビジネスコミュニケーションを手掛かりに
**University English Language Teaching as Ecological Perspective:
A Case from English Business Communication Class**

井田 浩之（城西大学）

本発表では大学英語教育を生態学的知見から捉え直すことに目的がある。「生態学的」とは事象に関わる当事者の観点から、自分と環境の関係を捉え直し、環境を変え、自らを変えていくことである（河野・田中, 2023）。英語教育では客観的な指標、閾値など汎化への取り組みがなされてきた。しかし、ヒト・環境との相互作用を捉えることは、大学英語教育の複雑性を理論化するのに役立つ。その手掛かりとして、英語ビジネスコミュニケーション科目を対象として考察する。

英語教育の隣接分野で、客観的指標の存在が批判されてきた。応用言語学ではヒトと人工物の関係について議論されてきた。Pennycook (2018)は、言語—人工物—行為主の関係に注目し、それらの境界が曖昧になっており、人と環境が一体化することを示唆する。また人の学びの柔軟性から指標への批判もある。リテラシー研究では Gourlay (2009)が「閾値」による実践を批判し、学習者の社会状況的・柔軟性を捉える視点が欠落していると指摘する。認知科学の分野では、Miyake(1986)は相互作用の研究から、理解深化にはレベルがあり可変性を持つこと、白水ら(2014)は発達段階といった客観的だとされている側面の学術的仮説の脆弱さを、鈴木(2018)は「人の学びには揺らぎ」があり、教えたことの伝達困難性(鈴木,2022)が指摘される。

これらの突破口として生態学性的視点（アフォーダンス）の導入が考えられる。アフォーダンスは「環境と動物の両者に関連する相補性」（ギブソン, 1979）で、「媒質や面や対象などに備わる、環境の物理的属性が動物の行為可能性を提供する」（田中, 2023, p.31）。教室環境が学習者の行為可能性や意思決定にも影響をすることから、学習者の主体的英語使用への意思決定にも関わる。英語ビジネスコミュニケーションとの関連では、「環境のパターンに意味があることを経験から学習する」（リード,2000, p.313）こと、

そして「環境に意味があることについての一般的な仮定が形成される」(同, p.313) ことに意義がある。英語教育との関連は、単なる言葉を学ぶのではなく、複数のエージェントと相互作用しながら教室内外で学習を深化させ、学習者が環境と互恵的な相互作用を行う実態を捉えるための理論的枠組みであり、学習者の意味生成の過程を丹念に実証することが可能になる。以下で実証する。ただし本研究は効果検証を行う研究ではないことを予め断っておく。

研究方法である。2021-2023 年度、大学3, 4年生の履修者(N=80)の英語ビジネスコミュニケーション履修者(選択科目)を対象に、授業で学んだことをリフレクションとして自由記述してもらった。授業構成(90分)、前半は教科書で基礎知識を学び、後半は教科書に基づくか、発展的な体験的側面を入れたアクティブラーニングである。得られた自由記述の言語データが回答者の経験を反映しているため、そのデータを精読・解釈することで、学習者の経験の文脈を断絶することを防止するためにコーディングやソフトは使用せずに分析した。コーディングは抽象化をもたらした結果の可視化には貢献するが、ここでは学習者の意味生成を文脈に照らして分析するため以上の分析手法が妥当だと言える。研究倫理に配慮し回答者の属性などは匿名で分析した。

結果である。(1)教室環境内での対人面の相互作用である。「ビジネスシーンで実際に活用できそうな授業内容が多かったことと、実践的に学べたことで、より自分が将来ビジネスにおいて英語を使用することをイメージでき[...]また、グループワークも多く、いろんな人と意見交換ができて楽しかったです。」(2)環境との相互作用である。「コミュニケーションをする環境に身をこなさない、もう全然英語が耳に入ってこないのを痛感した」と英語使用の環境面の要因に言及した回答が見られた。また、「講義の中で、働く中で遭遇するシチュエーションを想定してビジネス英語を学ぶことで、働く中でどのように英語を使っていけばいいのか学ぶことがわかった」とある。

生態学的側面を導入することで、学習者自ら環境に働きかけその相互作用から、今後の英語との関わり方を主体的に決定する実態が可視化できた。

英語教育への示唆として、学習者の持つコンピテンス(学ぶ力)を教師が把握できると同時に、学習環境デザインの観点から、教室選択、ICT導入、ニーズ分析、体験科目のデザインといった、学習者と環境の相互作用をカリキュラムデザインに反映させるチェックリストが構築できる。

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

11:00-11:30 (17502 教室) 司会：長田恵理（國學院大學）

非英語母語話者圏への留学：可能性と課題

Overseas Studies in Non-Native English-Speaking Countries:

Pros and Cons

藤尾 美佐（東洋大学）

Cancelled

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

「AI と切り拓く大学英語教育の未来」を話し合うシンポジウム

Developing Future College English Education with AI

JACET AI と大学英語教育研究会

JACET SIG on AI & College English Education

生成 AI の社会的影響は非常に大きく、大学英語教育でも適切な対応が急務である。本年度発足した「JACET AI と大学英語教育研究会」では、大学英語教育固有のトピックに取り組み、大学英語教育の未来を切り拓くことを目指す。本シンポジウムでは、以下の SIG メンバー4 人によるプレゼンテーションの後、他の会員のコメントを交え、フロアの皆様と議論する機会としたい。

司会 SIG 副代表：井田浩之（城西大学）

① 「AI との共存：第二言語習得とアカデミック倫理の視点から」

SIG 代表：松岡弥生子（University Of The People）

教育界での生成 AI の席捲は、授業活動の多様化、教材作成や課題添削における教師負担の軽減、機関や授業に特化したアプリやシステムの開発推進などの利益をもたらした。一方で、学生の過度な AI 依存は、英語ライティング力の習得が妨げられたり、自分で考えずに AI のアイデアに頼るなど独創性の育成が阻まれる危険性も孕む。第二言語習得とアカデミック倫理の立場から事例を参照し、論じる。

② 「次世代の英語学習：AI ツールの導入と教育への影響」

SIG 副代表：小張敬之（Globiz Professional University）

AI 技術を活用した英語教育の新たな展望についての提案である。2024 年度に導入された Progos Speaking Test と Scribo ソフトウェアの効果に焦点を当て、これらのツールが伝統的な教育アプローチと比較して、どのように学習者の能力向上に寄与するかを探究するものである。Progos Speaking Test は、スマートフォンを使用した 15 分間の AI ベースのスピーキング試験であり、CEFR レベルでの即時フィードバックと詳細な評価を提供する。これにより、学習者は自身のスピーキングスキルを具体的に把握し、改善点を明確にすることができる。

一方、Scribo ソフトウェアは、学生が書いた英文を AI が自動評価し、具体的な改善提案とアドバイスを提供する。この技術は、学生のライティングスキルを

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

顕著に向上させることが期待される。学生は自分の文書を批判的に見直し、より効果的なライティングを実現できるようになる。

シンポジウムでの発表では、これらの AI ツールが英語教育におけるどのような変革をもたらしたか、また、将来的にどのような改善が可能かについて議論を深めたいと考えている。さらに、人間と AI の違いや、技術的特異点（シンギュラリティ）が社会や教育にもたらす影響についても討論したい。この技術の統合が、英語教育の新たな標準をどのように定義するかを探る貴重な機会となるであろう。

③ 「中高英語科教職課程における AI の活用実践報告」

村岡有香（聖学院大学）

本発表では、中学高等学校外国語（英語）の教員免許状の取得を目指す学生たちが、DeepL や ChatGPT を用いて、学習指導案（LESSON PLAN）の作成に取り組む過程を紹介します。これらの AI ツールを利用することで、学生たちは授業で用いる Classroom English をより正確に考えることができ、また言語活動を考案をする上で、バリエーションの幅を広げることができるようになりました。また、模擬授業における英語での発話の正確性や流暢性が向上したと同時に、授業の質の向上にも繋がっているように感じます。英語科教職課程における AI の活用の可能性と教育効果についてご一緒に探求しましょう。

④ 「学生中心の言語学習システムにおける AI (DeepL) 活用の実践報告」

稲田貴子（日本保健医療大学）

本研究の目的は、コミュニケーションな大学英語教室における学生中心の言語学習システムについての学生の考えを理解し、それをどのように指導に生かすかを考察することだった。EFL の 1 年生を対象に、授業の最終日に 1 学期間に経験した学生中心の授業（DeepL 使用を許可）についての意見を essay writing として書いてもらい、そのデータを質的研究に使用した。その結果、言語学習スタイルには個人差があるが、学生主体の言語学習法は大学生に快く受け入れられ、クラスメートとペアやグループで学習することは、快適な環境を作りだし、高いモチベーションと自主性につながる事が分かった。そこで、教師が授業の事前準備の重要性を学生に納得させ、英語の 4 技能を同時に伸ばす授業を行い、学生に話す練習を沢山させる授業の必要性を提案したい。

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

●○● 発表審査査読者 ●○●

Paul McBride（玉川大学）、新井巧磨（早稲田大学）、伊藤泰子（神田外語大学）、長田恵理（國學院大學）、神村幸蔵（筑波技術大学）、下山幸成（東洋学園大学）、関戸冬彦（白鷗大学）、中山夏恵（文教大学）、西川恵（東海大学）、馬場千秋（帝京科学大学）、藤枝豊（大阪経済大学）
（以上 11 名 50 音順）

●○● 展示を行う賛助会員 ●○●

株式会社 成美堂

株式会社 アルクエデュケーション

株式会社 朝日出版社

株式会社 三修社

株式会社 エル・インターフェース

株式会社 松柏社

株式会社 mpi 松香フォニックス

株式会社 南雲堂

一般財団法人 国際ビジネスコミュニケーション協会

株式会社 金星堂

ETS Japan

株式会社 EdulinX

株式会社ダンケゼア

（以上 13 社申込順）

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER

●○● 支部大会運営組織 ●○● (更新中)

山口高領：大会委員長・運営委員長・当日待機

佐竹由帆：会場校担当・当日待機

新井巧磨：発表審査査読・広報・午前待機

伊藤泰子：発表審査査読・要綱

大井洋子：司会・当日待機

長田恵理：発表審査査読・司会・当日待機

小張敬之：司会・当日待機

神村幸蔵：発表審査査読・司会

河内山晶子：司会・当日待機

小屋多恵子：司会・午前待機

史傑：当日待機

下山幸成：発表審査査読者・web 更新・司会・当日待機

鈴木健太郎：広報

関戸冬彦：発表審査査読

辻るりこ：会計・午後待機

中山夏恵：発表審査査読・午前待機

西川恵：発表審査査読・要綱・当日待機

馬場千秋：発表審査査読・司会・当日待機

藤枝豊：発表審査査読

藤尾美佐：当日待機

午前のみ待機委員：小屋・新井・中山

午後のみ待機委員：辻・神村・河内山

当日待機委員：大井・長田・小張・史・下山・西川・馬場・山口

THE 17th ANNUAL CONVENTION OF JACET KANTO CHAPTER
●○● Call for Papers: JACET-KANTO Journal Vol. 12 ●○●

JACET-KANTO Journal Vol. 12 (JACET 関東支部紀要 第 12 号)

■原稿締切日：2024 年 8 月 31 日 (土) 23:59 JST

■原稿分量：A4 判横書き、英文 abstract、keywords、図、文献などを含めて計 20 枚
以内 (日・英とも)

■応募手順：

1. 支部ホームページ上の「JACET-KANTO Journal Vol. 12 Call for papers」から投稿規定を確認してください。

<http://www.jacet-kanto.org/>

2. 「Submission Form (申し込みフォームへ)」から 応募手続きを開始してください。

<https://jacet-kanto.org/journal/submission/index.html>

3. “JACET-KANTO Journal Online Submission Form” の必要事項を入力してください。

4. Form 上の “Attachment” にて、所定テンプレートによる応募原稿 (データファイル) を
「オンライン提出」してください。

5. Form 上の “Submit” をクリックし、応募手続きを完了してください。

■紀要発行日：2025 年 3 月 31 日 (月) (予定)

Vol. 9 から、J-STAGE に全文 XML で掲載しています。そのため、掲載原稿は検索・引用されやすくなっています。

関東支部大会での発表に基づいた原稿も大歓迎です。皆様からのご投稿をお待ちしております。